［その他（実践報告）］

１期生の老年看護学実習の学び

角山裕美子　多田健一　青柳直樹　菅沼里菜　袖山悦子
長岡崇徳大学

Learning of gerontological nursing practicum by 1st term nursing students

Yumiko Tsunoyama, Kenichi Tada, Naoki Aoyagi, Rina Suganuma, Etsuko Sodeyama
Nagaoka Sutoku University

要旨：本学は，新設大学（2019年４月開学）であり，老年看護学実習は2021年度から開始された．COVID-19の影響により学内実習を含めた老年看護学実習での学びをまとめたので報告する．

具体的方法は，老年看護学実習Ⅰ・Ⅱのレポート内容をデータとし，学生が「学び」として表現している部分を抽出してコード化し，内容の類似するものをまとめてサブカテゴリー，カテゴリーと抽象度を上げ検討した．倫理的配慮として，本報告の趣旨，参加の有無により不利益を被らないこと等を口頭と文書で説明した．

老年看護学実習Ⅰでは，介護老人保健施設で１名の高齢者を受け持ち，日常生活援助を通して，高齢者のもつ強みを活かした看護実践の必要性を実感できていた．老年看護学実習Ⅱでは，地域でくらす高齢者を支えるサービスどうしの連携・協働を図る必要性と，包括的・継続的に支援する看護の重要性を理解できた．以上の学びは，住み慣れた地域で生活する高齢者を支える地域包括ケアシステムの根幹につながっており，老年看護学実習の目的，目標に一定の到達が認められたと考える．

キーワード：老年看護学実習，学び，看護学生
Keywords：gerontological nursing practicum, student learning, nursing students

Ⅰ．はじめに

本学は,新設大学（2019年４月開学）であり，老年看護学実習は2021年度から開始になったが，新型コロナウイルス感染症（以下，COVID-19とする）拡大が我が国においても広がり，数回の緊急事態宣言の発令やそれに伴う対応がとられてきた．本学でもCOVID-19の影響を受け，実習委員会によるCOVID-19感染症対策に基づき実習が行われ,現在に至っている．

老年看護学実習は，４単位である．対象者が高齢者であることから，COVID-19の感染拡大を懸念し,臨地での受け入れ不可能もあったが,実習施設との連携で臨地に近い形で学内実習を行った．コロナ禍で迎えた本学１期生の老年看護学実習での学びをまとめたので報告する．本報告は，今後の教育方法の検討を行うための基礎資料とする．

連絡先：〒940-2135　新潟県長岡市深沢町2278番地８
E-mail：tsunoyama-y@sutoku-u.ac.jp
TEL：0258-46-6666　　FAX：0258-86-6637

Ⅱ．老年看護学実習の位置づけと展開

１．老年看護学実習の位置づけ

本学の老年看護学科目は，２年次前期に「老年看護学概論（1単位，15時間）」，後期に「老年看護援助論Ⅰ（2単位，30時間）」，３年次前期に「老年看護援助論Ⅱ（1単位，30時間）」である．３年次後期に「老年看護学実習Ⅰ（2単位，90時間）」「老年看護学実習Ⅱ（2単位，90時間）」の設定である．

本学カリキュラムでは，「看護の基本」「生涯発達と看護」「地域社会と看護」「看護の統合と実践」に区分されており,老年看護学実習は「生涯発達と看護」に位置付けられる．

２．老年看護学実習Ⅰ・Ⅱの目的，目標と展開

1）老年看護学実習Ⅰ

(1) 目的

老年期にある対象者の生活および健康上の問題を日常生活機能の観点から捉え，その個人と

家族を支援する看護実践に必要な知識・技術・態度を習得する.

(2) 目標

①地域で生活する高齢者との交流を通して，老年期にある対象者の身体的・精神的・社会的・発達状況の特徴を多面的視点から述べることができる.

②日常生活への適応及び自立を考慮した個別的な看護計画を立案し，必要な看護ケアを実施し，評価することができる.

③対象者の生活変化への適応を円滑にするための社会資源や，多職種連携を活用した援助の実際を見学し，看護計画に活かすことができる.

④高齢者ケアにおける保健医療福祉チームの連携の必要性と，その中での看護職の役割機能を理解し，チームメンバーと協力・調整する態度を身につけることができる.

⑤高齢者を尊重した態度で接することができる.

⑥老年看護に対する自己洞察を深め，自己の課題を表現することができる.

(3) 展開

本実習は，介護老人保健施設で1名の高齢者を受け持ち,看護過程を展開することを主軸に,目標①の地域で生活する高齢者と関わる実習を含む，2週間の実習である．老年看護学では,高齢者のもてる力，強みを活かし生活を営むことができるような支援，つまり目標志向型思考を重視し，実習前の「老年看護学概論」(2年次前期)「老年看護援助論Ⅰ」(2年次後期)「老年看護援助論Ⅱ」(3年時前期)の授業において生活行動モデルに即し「目標志向型思考」の強化を図っている．事前学習として，高齢者の身体的・精神的・社会的特徴，罹患の多い疾患,介護老人保健施設の目的・機能等を課しており,看護技術の復習を指導している．目標①については，長岡市シルバー人材センター及び長岡市コミュニティセンターで活動する地域の高齢者との交流を図る実習を行っている.

2021年度は，コロナ禍の影響があったものの感染対策を講じながら，介護老人保健施設,長岡市シルバー人材センターおよび長岡市コミュニティセンターでの実習は，すべて臨地で実施することができた.

2) 老年看護学実習Ⅱ

(1) 目的

様々な健康レベルにある老年期にある対象者とその家族の生活について知り，対象の生活する地域の特性から対象のくらしを地域で支えるシステムの展開を見学し，看護活動を展開するために必要な知識・技術・態度を学ぶ.

(2) 目標

①地域で生活する高齢者の身体的，心理社会的な視点から述べることができる.

②地域で生活する高齢者の取り巻く環境を説明することができる.

③地域で生活する高齢者のくらし・健康・介護・生活を支援する社会資源を述べることができる.

④地域で生活する高齢者の災害時の支援について実習施設のオリエンテーションと事前学習からまとめ，意見交換することができる.

⑤高齢者を尊重した関わり方ができる.

⑥高齢者にとって地域でくらすことの意味を表現することができる.

(3) 展開

本実習は，長岡市および見附市の地域包括支援センターと，地域包括ケアを先駆的に展開している地域密着型サービス事業所で学ぶ2週間の実習である.具体的に,地域包括支援センターでは,「介護予防ケアマネジメント」「包括的・継続的ケアマネジメント」「総合相談」「権利擁護」の実際を通して学ぶ．地域密着型サービスでは，小規模多機能型居宅介護や通所ケア等の実際を通して，高齢者の生活に応じて地域で展開されている支援の仕組みを学ぶ．事前学習として，地域包括支援センターの目的，役割と,地域包括支援センターの担当地域についての理解を深めることとしている．具体的には，コミ

ュニティアズパートナーモデル（以下，CAP モデル）に基づき地区視診することを提示している．地域密着型サービスについては，施設の機能，役割等をまとめることを指導している．

地域包括支援センターは１名を除きすべて臨地での実習が可能であった．地域密着型サービスでの実習は，コロナ禍の影響により，５名を除き他すべてが学内実習となった．学内実習では，実習第１日目は，実習への導入として講師派遣による地域密着型サービスの背景とサービス内容の講義を行った．実習最終日には，学生の学内実習の学びの発表に対する助言を，地域で高齢者を支えるシステムづくりのまとめを行った．このほか，地域でくらす高齢者を支えるサービスについて，視聴覚教材を用いた事例展開を行った．事例展開は，①入院中の心疾患のある高齢者が自宅へ退院する退院調整会議に関する事例，②退院後の生活を支えるサービス担当者会議に関する事例，③認知症のある高齢者のくらしを支えるための地域ケア会議に関する事例を教材として用い，看護の視点でアセスメントし必要な支援を検討した．

Ⅲ．老年看護学実習Ⅰ・Ⅱの学び

１．分析対象

分析対象は，2021 年度「老年看護学実習Ⅰ」と「老年看護学実習Ⅱ」を履修し，本報告に関する同意が得られた学生 38 名の課題レポートである．

２．分析の方法と倫理的配慮

分析方法は，老年看護学実習Ⅰ・Ⅱで課しているレポート内容をデータとし，学びの内容として表現している部分を抽出してコード化し，内容の類似するものをまとめてサブカテゴリー，カテゴリーと抽象度を上げ検討した．また，分析過程では，老年看護学教員間で討議を重ね，それぞれの分類について妥当性を検討した．

倫理的配慮について，対象者には，実習評価終了後である 2022 年２月 28 日に，本報告に関する趣旨，分析方法，匿名性の保持，自由意思の尊重と拒否ができること，参加の有無により成績に影響がないこと，実習評価を付けた後に対象とすること等を文書と口頭で説明し，同意を得た．データは，鍵のかかるキャビネットに保管し，氏名等の個人情報は符号化し，個人が特定されないよう十分に配慮すること，成果は本学紀要で公表すること等を説明した．

３．老年看護学実習Ⅰ

実習目標⑥「老年看護に対する自己洞察を深め，自己の課題を表現することができる．」をレポート課題としている．分析の結果，164 のコード，12 サブカテゴリー，５カテゴリーが導き出された．コードは〔　〕，サブカテゴリーは【　】，カテゴリーは＜　＞で記す．

老年看護学実習Ⅰの学びは，＜高齢者観の変化＞＜高齢者への看護介入の在り方＞＜施設における多職種連携と看護師の役割＞＜学生自身の課題＞＜高齢者の生活への支援＞であった．（表１）

1）＜高齢者観の変化＞

このカテゴリーは，〔同じ高齢者でも一律に身体機能の低下があるわけではないと実感した〕〔一人ひとりの生活習慣，思い，価値観もさまざまであることに気づくことができた〕〔高齢者は身体機能の衰えがありながらも，楽しみや生きがいを見出し，今できることを一生懸命に行っている〕などの記述が含まれる．学生は，高齢者が加齢的変化や疾患の症状がある中で，一人一人が自分の生活方法を選択し，自分の思いや生きがい，楽しみを見いだしていることに気づき，学生の高齢者観に変化を与えていた．

2）＜高齢者への看護介入の在り方＞

これは，【高齢者のもつ残存能力や強みを大切にする】【高齢者の生活歴や背景に目を向ける】【高齢者の意思の尊重，高齢者の尊厳を守りたい】【認知症高齢者とのコミュニケーション】から構成される．

表１　老年看護学実習Ｉの学び

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
高齢者観の変化	高齢者観の変化	同じ高齢者でも一律に身体機能等の低下があるわけではないと実感した
		一人ひとりの生活習慣，思い，価値観もさまざまであることに気づくことができた
		高齢者は身体機能の衰えがありながらも，楽しみや生きがいを見出し，今できることを一生懸命に行っている
高齢者への看護介入のあり方	高齢者のもつ残存能力や強みを大切にする	問題を解決しようとするだけでなく，その人の望む生活や，楽しみにしていること，生きがいなど強みに着目していく
		利用者の方の強みを活かした日常生活援助を行うことで，利用者の方のペースでADLを維持して日常生活を送ることができると学んだ
	高齢者の生活歴や背景に目を向ける	高齢者は私たちよりも長く人生を歩んできていることや豊富な知恵を持っていることから敬うことの大切さも感じた
		自分の生まれ育った文化から，現代の文化に適応し喪失体験や人間関係の再構築を行ってきた方々でありその習慣が現れている
	高齢者の意思の尊重、高齢者の尊厳を守りたい	年齢を重ねている方なので，自尊心を傷つけないような形で接していくことや，上から目線にならないように注意してコミュニケーションをと
		その人の価値観や人生観，認識していることを否定せず，尊重した姿勢で接することが大切である
	認知症高齢者とのコミュニケーション	ただ声をかけるのではなく対象者が理解して行動できる声掛けを行うことが，大切である
		相手の表情や反応から思いや訴えを汲み取れるようになることが課題である
施設における多職種連携と看護師の役割	多職種連携の必要性と看護師の役割	異常に早期に気づくことができるのは介護福祉士であり，その異常を看護師に報告するという多職種連携が重要だ
		一方的な報告や連携ではなく，お互い報告や連携をし，情報を共有することで，利用者の症状変化を捉えやすい
		看護師が責任を持って療養者の体調を管理し，その日の体調によって注意するべきところを多職種と共有する必要がある
	病院とは異なった老健の役割	介護老人保健施設は，高齢者の意思を尊重し，その人らしく日常生活を送れるようサポートし，生活の場であると感じた
学生自身の課題	看護過程を展開する困難感	１つの情報に囚われずに，現れている症状と疾患・身体的機能の関連性をより詳しく考える必要がある
		他の領域では治療目的であるため，疾患から考えられる問題についてアセスメントしてきたが，それとは少し異なることが難しく感じた
	自身の看護技術が未熟であることへの気付き	看護技術の未熟さを感じた
		練習は学生同士でしたことがあったが，実際に高齢者に実施するのは初めてで不安が大きかった。何度も指導者から助言をもらった
	実習の進め方の課題	目的を明らかにせず曖昧なままで情報収集や援助を行う傾向にあった
		相手に遠慮しすぎてしまうことや，本人の発言そのままに相手のことを捉えがちなことが分かった
高齢者の生活への支援	高齢者本人の生活を支える	好きなことをなるべく継続できるようにし，できないことのサポートをする
		対象者にとってよりよい生活とはどのようなものか，よりよい生活を送っていくために何が必要かを考えながら対応していく
	高齢者の社会参加	他者とつながりをもてる地域の場について看護師としても情報提供を行っていきたい
		やりがいや生きがいを見つけ，社会活動に貢献することで，残りの人生を充実させ，社会での役割を再獲得する

高齢者の持っている力を重視した援助は，学生が高齢者を肯定的に受け止め援助に達成感を感じるだけでなく，高齢者自身が自らの力を実感し生きることへの活力にもつながると言われている（箱石，吉新，原嶋，2014）．本実習においても，〔問題を解決しようとするだけでなく，その人の望む生活や，楽しみにしていること，生きがいなど強みに着目していく〕〔利用者の方の強みを活かした日常生活援助を行うことで，利用者の方のペースでADLを維持して日常生活を送ることができると学んだ〕のように，【高齢者のもつ残存能力や強みを大切にする】を学んでいた．〔高齢者は私たちよりも長く人生を歩んできていることや豊富な知恵を持っていることから敬うことの大切さも感じた〕〔自分の生まれ育った文化から，現代の文化に適応し喪失体験や人間関係の再構築を行ってきた方々でありその習慣が現れている〕のように，【高齢者の生活歴や背景に目を向ける】といった高齢者のもてる力や個別性に配慮した支援の必要性に気づくことができていた．さらに，〔年齢を重ねている方なので，自尊心を傷つけないような形で接していくことや，上から目線にならないように注意してコミュニケーションをとる〕〔その人の価値観や人生観，認識していることは否定せず，尊重した姿勢で接することが大切である〕のように，【高齢者の意思の尊重，高齢者の尊厳を守りたい】といった高齢者の意思を大切にした関わり，高齢者の強みを活かした看護の必要性についても理解を深めていたと考える．

また，【認知症高齢者とのコミュニケーション】では，〔ただ声をかけるのではなく対象者が理解して行動できる声掛けを行うことが大切である〕のように，コミュニケーションの難しさを感じながらも，指導者や教員からの助言や事前学習を活かしながら，コミュニケーションを図り信頼関係構築や情報収集に努めていた．同時に自己のコミュニケーション技術の振り返りにもなっていたのではないかと考える．〔相手の表情や反応から思いや訴えを汲み取れるようになることが課題である〕といった自己の課題の明確化や，コミュニケーションを通して認知症という疾患の理解の促進につながっていた．

3）＜施設における多職種連携と看護師の役割＞

これは，【多職種連携の必要性と看護師の役割】【病院とは異なった老健の役割】で構成される．【多職種連携の必要性と看護師の役割】では，〔異常に早期に気づくことができるのは介護福祉士であり，その異常を看護師に報告するという多職種連携が重要だ〕〔一方的な報告，連携だけでなく，お互い報告や連携し，情報を共有することで，利用者の変化を捉えやすい〕〔看護師が責任をもって療養者の体調を管理し，その日の体調によって注意すべきところを多職種で共有する必要がある〕などの多職種連携の必要性を示している．保健医療福祉チームにおける看護師の役割について理解していたと考える．対象者を包括的に捉えていくためには，多職種からの情報収集が不可欠であり，多職種連携・協働の必要性を捉えていた．【病院とは異なった老健の役割】では，〔介護老人保健施設は，高齢者の意思を尊重し，その人らしく日常生活を送れるようサポートし，生活の場であると感じた〕にあるように，介護老人保健施設という生活の場での看護について理解を深めていたと考える．

4）＜学生自身の課題＞

これは，【看護過程を展開する困難感】【自身の看護技術が未熟であることへの気づき】【実習の進め方の課題】で構成されており，学生は後期高齢者のなかでも90歳を超える超高齢期（日本老年学会・日本老年医学会，2017）を対象者とした看護過程の展開の難しさ，看護技術実践の難しさなどを実感し，学生自身の課題としていた．具体的には，〔1つの情報に囚われずに，現れている症状と疾患・加齢変化の関連性をより詳しく考える必要がある〕〔他の領域では治療目的であるため，疾患から考えられる

問題についてアセスメントしてきたが，それとは少し異なることが難しく感じた〕のように，介護老人保健施設における目標志向型思考での看護過程の展開への困難さを感じていた.また，〔看護技術の未熟さを感じた〕〔練習は学生同士でしたことがあったが，実際に高齢者に実施するのは初めてで不安が大きく，何度も指導者から助言をもらった〕のように，【自身の看護技術が未熟であることへの気づき】につなげていた.〔目的を明確にせず曖昧なままで情報収集や援助を行う傾向にあった〕〔相手に遠慮しすぎてしまうことや，本人の発言そのままに相手のことをとらえがちなことが分かった〕のように，実習を通しての自己の課題を明確化させていた.

5）＜高齢者の生活への支援＞

地域で生活する高齢者との交流を通して,【高齢者本人の生活を支える】【高齢者の社会参加】のように，高齢者が住み慣れた地域で，その人らしく生活できるような支援が必要であることを学びとして挙げている．具体的には,〔好きなことをなるべく継続できるようにし，できないことのサポートをする〕〔対象者にとってよりよい生活とはどのようなものか，よりよい生活を送っていくために何が必要かを考えながら対応していく〕〔他者とつながりをもてる地域の場について看護師としても情報提供を行いたい〕〔やりがいや生きがいを見つけ，社会活動に貢献することで，残りの人生を充実させ，社会での役割を再獲得する〕である．高齢者の交流の場や機会の確保，嗜好を取り入れた個別的なサポートなどの必要性を学んでいた.

以上から，学生は，介護老人保健施設という病院とは異なる生活の場での看護が果たす役割だけでなく，高齢者のもつ強みを活かした看護実践の必要性を実感し，実践のなかで学生自身の課題を明確化させていたと考える．さらに，地域でくらす高齢者との交流から，社会的側面の強みを捉え，その人らしい支援の必要性を学んでいた．加えて,「目標志向型思考」で看護過程を展開することで，肯定的な高齢者観の変化につながると考えられる.

４．老年看護学実習Ⅱ

実習目標⑥「高齢者にとって地域でくらすことの意味を表現することができる.」をレポート課題としている．分析の結果，110 のコード，16 サブカテゴリー，6 カテゴリーが導き出された．コードは〔　〕，サブカテゴリーは【　】，カテゴリーは＜　＞で記す.

学生が捉えた高齢者が地域でくらす意味は，＜その人らしくくらす＞ことであり，＜一人ひとり地域でくらす意味は異なる＞．高齢者が地域でくらし続けるためには，＜高齢者による住みやすい地域づくり＞＜地域でくらす高齢者を支えるサービスの役割＞が重要である．＜地域でくらす高齢者を支える課題＞を明らかにさせており，それらに対応する＜地域でくらす高齢者を支えるための提案＞がなされていた.

（表２）

1）＜その人らしくくらす＞

これは,【高齢者が主体性を持ち，自分らしくくらす】【家族や地域との交流がある】【安心感ある】【生きがいや楽しみがあり，充実感がある】で構成される.【高齢者が主体性を持ち，自分らしくくらす】では,〔地域でくらすことは高齢者が自らどうしたいかという自主性，自立性を引き出すことにつながる〕〔病を抱えても地域でくらすことはできるだけ今までの自分らしさが保てる〕のように，老化や疾病に伴い介護が必要な状態であっても高齢者自身が必要な介護サービスを選択し，自分らしい生活を継続できることを学んでいた．また,【家族や地域との交流がある】ことで顔なじみの人々に囲まれており,そのことで【安心感ある】ことや,【生きがいや楽しみがあり，充実感がある】ことにもつながっている．そして，高齢者にとって住み慣れた地域でくらすことは,【思い入れのある思い出の場でくらす】ことと捉えていた.

表２　老年看護学実習Ⅱの学び

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
その人らしくくらす	高齢者が主体性を持ち，自分らしくくらす	地域でくらすことは高齢者が自らどうしたいかという自主性，自立性を引き出すことにつながる
		病を抱えても地域でくらすことはできるだけ今までの自分らしさが保てる
	家族や地域との交流がある	地域は家族や交流しながらくらせる
	安心感がある	地域ではなじみの環境から安心してくらせる
	生きがいや楽しみがあり，充実感がある	地域には楽しさや生きがいがある
	思い入れのある思い出の場でくらす	高齢者にとって生きてきた証，思い入れのある場である
一人ひとり地域でくらす意味は異なる	一人ひとり地域でくらす意味は異なる	高齢者が地域でくらす意味は一人一人違う
		最期まで住み慣れた自宅にいたい思いがある
高齢者による住みやすい地域づくり	高齢者による住みやすい地域づくり	高齢者自身による地域づくりの参加
		高齢者がボランティアに参加し住みやすい地域づくりにしている
高齢者を支えるサービスの役割	インフォーマルサービスが不可欠	一人暮らしの高齢者は地域住民といったインフォーマルサービスが重要である
	フォーマル・インフォーマルサービスの連携・協働の重要性	地域でくらすことは専門職だけでなく，その地域との連携・協働が重要である
		インフォーマルとフォーマルサービスをつなぎ合わせることが大事である
	地域包括支援センターの個別訪問の必要性	地域包括支援センターの個別訪問はもしもの対応相談につながり，不可欠なサービスである
	地域でくらす高齢者を支える看護者の役割	地域でくらす高齢者を支えるには，それぞれの生活スタイル，望むことを把握し，支援することである
地域でくらす高齢者を支える課題	地域ごとの課題	地域でくらし続けるには，買い物などでの交通手段が必要である
		地域のつながりの強弱はそれぞれ異なるため，それらに対応する必要がある
	認知症の取り組みへの課題	認知症の取組として正しい知識，見守りの協力が課題である
		認知機能低下しても地域でくらし続けられる支援が必要である
	インフォーマルサービスの課題	インフォーマルサービスの担い手不足が課題である
地域でくらす高齢者を支えるための提案	インフォーマルサービスへの提案	若年者らとの交流により世代間交流が持て，孤立予防につながる
	地域づくりへの提案	高齢者をよく知る地域住民が互いに見守り声掛けできる体制づくりが大切である

2）＜一人ひとり地域でくらす意味は異なる＞

これは，〔高齢者が地域でくらす意味は一人ひとり違う〕〔最期まで住み慣れた自宅にいたい思いがある〕のように，高齢者が抱える思いから地域でくらす高齢者の個別性を捉え，高齢者のくらしに多様性があることを学んでいた．

3）＜高齢者による住みやすい地域づくり＞

これは，〔高齢者自身による地域づくりの参加〕〔高齢者がボランティアに参加し住みやすい地域づくりにしている〕のように高齢者は支援の受け手としての対象だけでなく，支援者の一員として地域づくりへの積極的な参加者であり，高齢者の強みの一つと捉えていた．

4）＜高齢者を支えるサービスの役割＞

これは，【インフォーマルサービスが不可欠】【フォーマル・インフォーマルサービスの連携・協働の重要性】【地域包括支援センターの個別訪問の必要性】【地域でくらす高齢者を支える看護者の役割】で構成される．〔一人暮らしの高齢者は地域住民といったインフォーマルサービスが重要である〕のように【インフォーマルサービスが不可欠】であること，〔地域でくらすことは専門職だけでなく，その地域との連携・協働が重要である〕〔インフォーマルとフォーマルサービスをつなぎ合わせることが大事である〕のように【フォーマル・インフォーマルサービスの連携・協働の重要性】を学んでいた．また，〔地域包括支援センターの個別訪問はもしもの対応相談につながり，不可欠なサービスである〕のように【地域包括支援センターの個別訪問の必要性】を実感しており，〔地域で暮らす高齢者を支えるには，それぞれの生活スタイル，望むことを把握し，支援することである〕のように【地域でくらす高齢者を支える看護者の役割】を明確化させていた．

5）＜地域でくらす高齢者を支える課題＞

これは，【地域ごとの課題】【認知症の取り組みへの課題】【インフォーマルサービスの課題】で構成される．

事前学習で各地域包括支援センターの担当地域をCAPモデルによる情報収集・アセスメントを行い，実習に臨んだことで，学生は【地域ごとの課題】を捉えている．これは，〔地域でくらし続けるには，買い物などでの交通手段が必要である〕〔地域のつながりの強弱はそれぞれ異なるため，それらに対応する必要がある〕のように高齢者の交通手段の選択肢が地域によって偏りがあること，地域住民どうしの交流の違い，インフォーマルサービスの違いといったことが挙げられる．

地域密着型サービス事業所の学内実習では，視聴覚教材を用いた事例検討を行い，〔認知症の取組として正しい知識，見守りの協力が課題である〕〔認知機能低下しても地域でくらし続けられる支援が必要である〕のように，地域での【認知症の取り組みへの課題】を明らかにしている．地域の今後の取り組みについて，〔インフォーマルサービスの担い手不足が課題である〕のように〈インフォーマルサービスの課題〉である人材確保が挙げられた．

6）＜地域でくらす高齢者を支えるための提案＞

地域でくらす高齢者を支えるには，〔若年者らとの交流により世代間交流が持て，孤立予防につながる〕のように【インフォーマルサービスへの提案】や，〔高齢者をよく知る地域住民が互いに見守り声掛けできる体制づくりが大切である〕のように【地域づくりへの提案】として考えられていた．

以上から，学生は，地域でくらす高齢者を支えるサービスがシステムとして機能するには，高齢者個々のくらしに応じたサービスの組み合わせが必要であり，サービスどうしの連携・協働が求められることを学びとして捉えたと考える．多様なサービスの橋渡しを，地域包括支援センターが担っているという役割の重要さを捉えていた．加えて，地域でくらす高齢者を包括的・継続的に支援するには，インフォーマルサービスの充実が課題であり，地域特性をいかした地域づくりの必要性，社会資源の開発が提案されていた．地域包括ケアシステムの深化ととも

に，今後は，臨地とともに実習内容の検討と共有が必要と考える．

Ⅳ．結語

老年看護学実習である老年看護学実習Ⅰと老年看護学実習Ⅱの学びとして次のことが挙げられた．老年看護学実習Ⅰでは，介護老人保健施設で１名の高齢者を受け持ち，生活行動モデルの枠組みに則して対象を捉え，その人らしい日常生活援助を通して，高齢者のもつ強みを活かした看護実践の必要性を実感できていた．「目標志向型思考」で看護過程を展開することで，肯定的な高齢者観の変化につながると考えられ，今後も強化していく必要があると考える．老年看護学実習Ⅱでは，地域でくらす高齢者を支えるシステムの実際を通して，サービスどうしの連携・協働を図る必要性と，包括的・継続的に支援する看護の重要性を理解できた．

以上の学びは，住み慣れた地域でくらす高齢者を支える地域包括ケアシステムの根幹につながり，老年看護学実習の目的，目標に一定の到達が認められたと考える．

本報告は，次年度以降の老年看護学領域の教育指導上，活用できる基礎的資料である．今後も臨地との連携を図り，老年看護学実習の目的・目標の達成度をより高められるような指導内容，実習内容の再構築に努めていきたい．

引用文献

箱石文恵・吉新典子・原嶋朝子（2014）：ICFを活用した目標志向型思考の老年看護学実習展開における学生の気付き，日本老年看護学会論文集，PP118-121.

日本老年学会・日本老年医学会（2017）：高齢者の定義と区分に関する，日本老年学会・日本老年医学会　高齢者に関する定義検討ワーキンググループからの提言（概要），（2022年12月１日入手）https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/proposal/pdf/definition_01.pdf